東洋史研究

明代のオルドス

——天順・成化時代——

田村實造

明代の對外關係といえば、俗に南倭北虜のことばからも、しられるように、倭寇による沿岸地域の掠奪と、モンゴル族による長城地帶の侵寇とがあげられる。とくにモンゴル族の防衛には、明朝は治世三百餘年間を通じ、その總力をかたむけたため、北邊防衛の問題は、明朝にとつては、ただに軍事上だけでなく政治の動向、經濟的施策そのほか國政のすべてに、ふかい關係をもつていることを注意しなければならない。明の北邊防衛は、東方のウリアンカ三衛部に對する薊州鎮を中心とする地區、いわゆる東三邊と、韃靼部に對する大同・宣府兩鎮を中心とする地區、いわゆる中三邊と、楡林鎮を中心するオルドス地區の三地區に重點がおかれていた。本論ではオルドス地區、とくにダヤン＝カーン出現以前の天順・成化時代におけるオルドス地區の防衛問題について考察してみたい。

一

オルドス（鄂爾多斯）とは、陝西省北方の黄河彎曲部のうち、陝西・甘粛の北境をかぎる長城以北の地區――それは現在は河套行改區[1]といわれる――をさす。中國ではこの地域を、ふるくは河南（黄河南）、明代以後は河套あるいは套中などとよぶが、そのモンゴル名は「河でかぎられた地」といういみをもつ Gohobun-Tori である。したがつて、オルドスとは、もともと地名ではなく、明代モンゴル族のうちで、この地にあるチンギス＝カーンの大廟を守護する一部族にあたえられた名稱である[2]。

この地は草原・砂丘におおわれ、その間におおくの鹽湖が散在するが、牧草にめぐまれ遊牧に適するため、匈奴をはじめ柔然、突厥（トルコ）、ウイグル、モンゴルなど、北アジアの遊牧民はもとより、西方のチベット族からも、つねにねらわれ、中國としては、その防衛にたえず力をそそがねばならなかつた。さいわい、ここは北には黄河をへだてて陰山山脈が東西にはしり、西には賀蘭山脈が南北につらなつて、天然の防塞をなしてはいるが、ひとたびこの地區が遊牧民に占據されると、長安、洛陽、開封、太原など中原の心臓部が、その死命を制せられることになる。そればかりではない。同時にまた中央アジアへの公路――絹の道――が、かれらの手におさえられることにもなる。したがつて、つぎにみるように、オルドスをめぐる北アジア遊牧民族と中國民族との攻防は、有史以來のことだといつてよかろう。

ふるく戰國時代、趙國はこの地域の防衛のため、黄河以北に長城を構築したが、ついで秦の始皇帝は、その治世の三十二年（B. C. 213）將軍蒙恬をして三十萬の遠征軍をひきいて胡をうたしめ、また翌年匈奴を西北にしりぞけて、河南（オルドス）の地に九原郡三十四縣をおいた[3]。これは匈奴の頭曼單于（冒頓の父）のときといわれる。漢の武帝も元朔二年（B. C. 127）匈奴を漠北に驅逐して河南を收復し五原郡をおいた。しかし五胡時代には、南匈奴部の赫連勃勃がこの地を占據し、獨立して大夏國をおこした。隋代には、ここに勝州楡林郡をおき、沿邊に長城をきずいて守護したといわれる。唐代になると、中宗の景龍二年（708）、張仁愿は黄河以北の地を經略して、河北に東・中・西の三受降城を構築し、河南防衛の完璧を期した。ところが唐末には、拓拔思恭がこの地を勢力下におさめ、やがて宋代に入ると、西夏國に領有されるにいたつ

た。

明初に太祖は、陝西一帶のモンゴル族を漠北にしりぞけると、オルドス防衛のため東のかなめとして東勝衛を、また西のおさえとして寧夏鎮をおいた。東勝衛は元代の東勝州で、歸綏の東南、いまの涼城附近に比定される[4]。この地は陰山山脈にそうて東流してきた黄河が、南に急カーブする部分の外東北部に位置し、中國歴代の諸王朝にとつては、古來オルドス防衛上もつとも重要視されている。太祖は東勝衛をおくと、これにオルドス地區の十二縣（獨樂・木禾・白土・奢延・阜狼・圄陰・鴻門・羅陽・朔方・寧渾・渠搜・臨戎）を統御さすとともに、東は遼東、西は甘肅をつらねる結節點としての、やくわりをもふりあてた。

オルドスをへだてて西南方へ東勝衛城と對角線的な位置にあるのが寧夏鎮である。この寧夏鎮と東勝衛とが健在であるかぎり、オルドス地區は、北は黄河と陰山山脈、西は北流黄河と賀蘭山脈という天然の防衛線にまもられているため、いちおう安全といえる[5]。ところが太祖の死後おこつた靖難の變の數年間に、太祖が苦心經營した北邊の防衛線もすつかり混亂したため、東勝衛も關内にうつり、衛城は廢罷されるはめになつた（永樂元年）。東勝衛はその後正統のはじめ（元年九月）一時守備兵を駐屯させたことはあつたが、エセンの入寇後は、この方面はまつたく敵手にゆだねられるようになり、やがてモンゴル族がオルドスに住牧するにいたつた。

モンゴル族のオルドス潛入が顯著になるのは、英宗の正統はじめごろからのようで――モンゴルがわからいえば、エセンの統一以後さかんになつた――土木の敗戰後の正統から景泰にかけては、延安・綏德の諸衛や楡林・黒河・神木などの城堡が、連年にわたつて侵寇をうけている。これについては明代滿蒙史料・蒙古篇を參照すれば、一見してあきらかである。しかし、正統からつぎの景泰時代は、モンゴル族のオルドス入居は、まだ比較的小規模なものであり、それも冬の結氷期にかぎられており、したがつて、さほどふかくも侵入しなかつた。そのため明がわの延安・綏德沿邊における防衛も、とかく放置されがちであつた[6]。ところが天順時代になると、オルドスの形勢は急に重大化するようになつた。全邊

略記卷四、陝西延綏略にも、成化八年の條に余子俊――當時かれは巡撫延綏右副都御史であつた――の上疏をのせて

正統のはじめになつて、虜族がしだいに黃河をわたつて邊にちかづきはじめたので、守臣は緣邊に界石を立て、また榆林の諸營堡を創置した。天順以來虜は、わが延慶・寧夏・甘肅の三邊のうち、延慶地區だけが險阻でないのに乘じ、邊人を鄕道として、ついに河套に入屯した。そのため緣邊一帶にわたり、墩臺をきずき墻堡をたてるようになつた

という。

二

天順時代主としてオルドスに入寇したのは、タタール部の有力者ボライ（孛來Bolai）およびその一黨であつた。皇明實錄によつてみても、天順元年（1457）十一月庚午、明朝は來降したモンゴル人からボライの來寇をしつて、寧夏・延安・綏德などに駐在する鎭守總兵官に示達して戒嚴させている。翌年閏二月丁卯の條にみえる延綏東路都指揮李鑑の奏によれば、このころボライの部下二千餘人が、すでに河套に潛住していたことがわかる。そして、おなじく天順三年正月甲辰の條によれば、前年（二年）十二月癸未、二萬餘騎が安邊營管內に侵入して剽掠をほしいままにしたが、總兵官石彪や楊信らの力によつて擊退されたという。ついで四年正月戊子にも、二萬餘騎をもつて榆林城に入寇している。なお全邊略記卷四、陝西延綏略に

天順七年春、總兵梁瑤奏、河水開矣、孛來逼矣、請撤諸軍還、報可

といえば、天順中を通じて、ボライの部衆は數萬の人數でオルドスに潛住し、黃河が凍結する冬のあいだは、その主力が大擧して入寇し、延安・綏德管下の榆林、神木、高橋兒、安邊營などの各城堡を劫掠していたものとかんがえられる。それではボライとは、どのような人物であろうか。和田清博士によれば、オイラート部長エセン（也先）がアラク（阿剌）知院にころされると、ただちに（景泰五年1454）兵をあげてアラクを襲殺した孛羅平章というものが、ボライそのひとであると[7]。ボライはその後タタール部の有力者として、小王子（カーンの Tokto Bukha 脫脫不花王の子 Makhagurkis

馬可古兒吉思）を擁立し、みずからは太師と稱したが、やがて小王子のマカグルキスと不和になり、これを弑した。しかしその身もたちまちモリカイ（Molikhai毛里孩）によってほろぼされた（成化二年1466）⑧。このことは皇明實錄成化三年春正月丙子の條にみえるモリカイの書に、

孛來太師近殺死馬可苦兒吉思可汗、毛里孩又殺死孛來

とあることからもあきらかである。

いまみたように、成化二年ごろボライがモリカイにたおされると、モンゴリアにおいては、モリカイの勢力がさかんになつた。もつとも皇明實錄によれば、モリカイはそののちオロヂユ（Oroju 阿羅出、斡羅出）ともあらそつて、これをオルドスから追放している。成化二年春正月丙子の條には、さきの文につづいて、

（毛里孩）後又新立一可汗、有斡羅出少師者、與毛里孩相讐殺、毛里孩又殺死新立可汗、逐斡羅出、今國中無事、欲求通好

という。この新立可汗とは、先可汗マカグルキスの異母兄にあたる摩倫汗のトグス（Tögüs 脱谷思）であり、オロヂユのオルドス追放は成化二年九月のことである⑨。したがつて、これらのことはボライの殺害事件とともに、いずれも成化二年中におこつたものと、かんがえられる。

さてボライの勢力をうけつぎ、トグス＝カーンを弑したうえ、オロヂユを驅逐して、ついに權力を一手ににぎつたモリカイは、兀良哈三衛（ウリアンカ）をもおさえ、東は遼東から西はオルドス、甘肅にわたる北邊一體に侵寇をほしいままにしている。もともとモリカイは、オンニュード（Ongnighud 翁牛特）部の部長として勢力があり⑩、景泰六年には、ボライに協力して、小王子マカグルキスを擁立し、天順四年以後は、原住地の北滿から南下してオルドスに入り、ボライとともに西邊に活躍している。成化時代になつても、實錄には成化元年十一月癸丑の條に、分守延綏東路都指揮同知の鄭時の奏として、

稱虜衆甚盛、有毛里孩部下人馬俱在四柳樹・木瓜園等處安營

とあるのをはじめとして、しきりに延安・綏德地區に侵寇している。モリカイのオルドス侵犯は、成化二・三年ごろが、もつともはげしかつたようで、かれは成化二年七・八月には寧夏・平涼・固原地方にまで深入した[13]。このようにモリカイがオルドスに大擧して住牧したのは、ひとつには西北方からオイラート部が壓力をくわえていたため、その脅威を感じて、自由に河外にでられなかつたことも、かんがえねばならない[14]。モリカイの勢力も成化二・三年ごろが絶頂期であつて、成化四年初冬には、はやくも沒落している。實錄、成化五年十一月乙未の條に

時孛羅部落自相仇殺、分而為三、孛羅人馬往鰥駒河、哈答卜花往西北、故毛里孩子火赤兒往西路

というのは、モリカイ滅亡後のかれの主部落が分裂したことを、つたえたものであろうが、この孛羅部落の孛羅が、和田博士の考證されたように、はたしてのちに實錄にみえるボルコ（Bolkho 孛羅忽）太子とすれば[15]、モリカイは成化二年に摩倫汗トグスを弑殺したのち、トグス＝カーンの從子にあたるボルコ太子（蒙古源流には博勒呼濟農巴延蒙克 Bolkho Jinong Bayan Möngke）を擁していたようである。鄭曉の皇明北虜考にも、

成化のはじめ阿羅出は乩加思蘭とむすび、孛羅忽は毛里孩とむすび、おのおの黨をつくり河套に出入す

とみえる。モリカイ沒落ののち勢力をえたのは、さきにモリカイにおわれたオロヂユと、いまひとりは、西方系の勢力を代表するベケリスン（Bekerisün）であつた。この兩人は、はじめ、しばらくはボルコ太子を擁して、たがいに協力し、オルドスに潛入して延綏、慶陽方面へ侵寇をほしいままにしていた[16]。

しかしオロヂユとベケリスンとの協力體制は、まもなくやぶれ、オロヂユはベケリスンに打倒されることになつた。それは成化七年秋ごろのことである。すなわち成化六年ごろハミ附近から東遷してオルドスに潛入したベケリスンは[17]、やがてボルク太子とむすんで、先住のオロヂユを河外に追放したのである。このことは實錄成化七年冬十月丁酉の條にみえる兵部の議に、

今乩加思蘭等又收併阿羅出部下殘寇、豈肯安處、不可不爲之備

とか、また同八年春正月癸卯の條にみえる陝西巡撫左副都御史馬文升の奏に

虜酋乩加思蘭糾合阿羅出部落、渡河犯邊、已及歲餘、今雖互相讐殺、分爲二路、而乩加思蘭方駐花馬池定邊營外、分遣部落、入鈔固原・寧夏

などとあるところから、あきらかであらう[16]。こうしてオルドスはベケリスンの支配下に歸したので、ベケリスンはボルク太子をカーンに立てんとしたが、ボルク太子はうけなかつた。そこで成化十・十一年の交に、ボルク太子の叔父にあたるマンダグール（Mandaghul 滿都魯）太子が擁立され[17]、そのままマンダグール＝カーン（Mandaghul Khan 滿都古勒汗）とよばれた。

ベケリスンは、マンダグール＝カーンにそのむすめをあたえるなどして勢威をふるつたが、やがて兩者は不和になり、成化十五年にマンダグールはベケリスンに追放された[18]。しかしベケリスンも、おなじ年の成化十五年に、族弟のイスマイル（亦思馬因 Ismail）にころされ[19]、かわつてイスマイルが、三衛（朶顏衛）の有力者ドロカン（脫羅干）らの協力をえて、ボルク太子の遺兒を擁立して小王子と稱した。その後小王子は成化十九年以降イスマイルをして西方のオイラート部との連携をはからしめたが、不幸にも成化二十二年ごろイスマイルとオイラート部長ケシ（克失・克捨）との死にあい、さらには小王子自身も翌二十三年三月ごろ死んだので[20]、小王子の遠大な計畫も中斷のやむなきにいたつた[21]。かわつて弟のバヤンメンケ（Bayan menge 伯顏猛可）王がカーンをついで小王子とよばれたのは、實錄によれば、弘治元年五月（乙酉）のことであり、このひとが有名なダヤン＝カーン（Dayan Khan 達延汗）である。

以上、主として天順末年から成化時代にわたる時期のモンゴリアの政治情勢について、かんたんにのべてきたが、要するに、モリカイが制覇した成化二年ごろからモンゴル族のオルドス潛住は本格化し、しぜんかれらの侵寇も、ようやくはげしくなり、かつ不斷におこなわれるようになつた。モリカイは、モンゴル部内でも東方部のオンニュード部の部長であつたため、その中心勢力は韃靼部や三衛部の部民からなつていたであろう。しかし、成化五年モリカイをたおして、これ

にかわつたベケリスン以後、すなわち、成化から弘治のなかごろまでは、オルドスでは西方系が中心勢力をなしたようである。このように、オルドスを占據したモンゴル族は、モンゴリアにおける權力者の交代につれて、その中心勢力が、つぎつぎにかわつていつた。しかしかれらの勢力關係がどのように變化しようと、成化時代からかれらは本格的にオルドスに住牧するようになり、その侵寇も不斷におこなわれるにいたつた。それでは、これに對して明がわは、どのような防衛方針をもつて、のぞんだであろうか。

三

いまみたように、モンゴル族がオルドスに大擧して住牧しはじめるのは、天順時代のボライ太師以後である。ボライは景泰五年から十年あまり權勢をほしいままにしていたが、成化二年に打倒され、かわつてモリカイが權力をにぎると、モンゴル族の侵寇は、延安・綏德地區に對し、しだいにはげしくなつてきた。

かれらは、おおく榆林をめざしたが、榆林以西においては、皇明實錄、成化八年三月乙卯の條にみえる吏部右侍郎葉盛の奏にあるように、寧塞・保安より鄜州をめざすものと、安邊・定邊より環・慶にむかうものと、寧夏の花馬池・武經營より鹽池・高橋兒・萌城をへて固原にいたるものとの三つの侵入コースがあつたようである[29]。

このような侵寇に對し、明がわは延綏・慶陽の二路が、その防衛を擔當するわけであるが、その範圍は、東は山西の偏頭關に接し、西は寧夏の花馬池にいたる二千餘里の長距離にわたるため、天順時代にはまだ充分な防備の體制をととのえることができなかつた。たとえば全邊略記卷四、陝西延綏略に、成化初年に上奏した延綏總兵官張傑の方略がみえるが、そのなかの一節に

延綏・慶陽の境域は廣さ千里（二千里？）にわたり、所轄の營堡は二十五をかぞえる。毎堡の頓兵は百人ないし二百人にすぎないので、その勢力は孤弱なうえに、たがいに、とおくはなれていて急には應援しがたい

という。これは實錄、成化二年三月己未の條の延綏紀功兵部郎中楊琚の奏にも

延綏・慶陽の二境は、東は偏頭關に接し、西は寧夏の花馬池にいたる二千餘里、營堡は迂疎、兵備は稀少であるため、河套の達賊がしばしば邊患をなす

というように、おそらく當時の實狀をよくつたえているものと、おもわれる[29]。

ところが成化時代になると、明朝もようやくオルドス緣邊の防衛に意をはらうようになつた。すなわち成化二年十一月には、兵部尚書王復の企劃をいれて、臨邊の府谷堡・白洛城・塞門堡など諸營堡の移出や整備を斷行するとともに、高家堡・雙山堡・楡林城・寧塞營・安邊營・定邊營の城營間の連絡を密接にするため、その間三十里ごとに哨堡や墩臺數十座を添設して、一旦緩急あれば烽火をもつて相連絡することにした。また、これらの諸營は、背後の慶陽および環縣とも緊密にむすびつくようにした[30]。そしてまた、このころから延綏・慶陽管内の民兵、土兵を徵集訓練して官兵とともに防備にあたつている[31]。

このような延綏地區における防衛第一線の重心は、馬文升の奏に、陝西三邊（延綏・寧夏・甘肅）楡林最爲要害とか、以楡林一往爲緣邊、以米脂・綏德・安定・金湯・鎭邊・柔遠・懷安・環縣・慶陽・平涼・固原一往爲次邊、軍儲貯于次邊、而重兵防于緣邊[32]などというように楡林鎭であり、ここに前線守備隊の本營があつた。楡林鎭の沿革なり、鎭城の構成なりについてみると、はじめ正統二年に都督王禎が楡林の守備に任じると、かれはここに築城し、延安・綏德の前衛とした。そののち成化のはじめごろまでに、所屬の營堡は二十三をかぞえた。ついで成化七年に楡林衛にのぼされ、さらに九年六月には、延綏鎭が綏德州からうつされたが、これに應じて巡撫余子俊はこの城を擴大し、城内に學校をたて、城外に屯田を開墾したうえ、所屬の營堡も增設している。全邊略記卷四には、これらのことを要記して

按延綏自正統中、命都督王禎守楡林、禎始城之、及十八（二十三？）寨、洎成化七年置衛、八年(余)子俊廣楡林城、增三十六營堡、請盡釐陝中人、有伍籍詭落者、及罪謫南戍、子孫不能南風土者、實其衛、又擇俊子弟之讀書、請建學立官師爲弟子員、俗初不習藝圃、乃求種敎植、自是蔬果與內地等、內邊曠地、皆墾屯田、歲得數萬石

という。皇明實錄、成化八年三月庚申の條に吏部侍郎葉盛らの奏をのせているが、その一節にも

一、延綏沿邊地方、自正統初創築榆林城等營堡二十有三、於其北二三十里之外築瞭望墩臺、南二三十里之內植軍民種田界石、――――七年六月內用總兵巡撫官之議、乃依界石一帶山勢、隨其曲折、剷削如城、高二丈五尺、川口左右俱築大墩、調軍防守、以爲一勞永逸之計

とみえるが、これらの邊牆修築には余子俊があたつたことはあきらかである。そのほか明史卷一七六、余子俊の傳にも

初延綏鎭治綏德州、屬縣米脂・吳堡悉在其外、寇以輕騎入掠、鎭兵覺而追之、輒不及、往往得利去、自子俊徙鎭榆林、增衛益兵、拓城置戍、攻守器畢具、遂爲重鎭、寇抄漸稀、軍民得安耕牧焉

といい、皇明職方地圖、榆林鎭圖の條にも余子俊の功を稱して、

至撫臣余子俊、始議徙鎭榆林、實以淸勾之逋卒、益以南土之餘丁、置衛所、墾屯田、立學較、屹然成重鎭焉

という。この榆林鎭の防衛は、その後も增强され、東路・中路・西路の三路には、それぞれ十數營堡が設置されていた[29]。なお榆林一帶の屯田は、すでに成化六年三月巡撫王銳の上言によつて開設に著手され、官軍をして耕種せしめることが、みとめられたが[30]、後述するように、成化九年余子俊によつてオルドスの東西全域にわたる邊墻が完成すると、墻內の屯田化は、いちだんとすすめられていつた。

成化時代オルドス延綏地區におけるモンゴル族防衛の第一線に活躍した將軍としては、房能、王銳、馬文升、葉盛、王越、余子俊、朱永、許寧らがあげられる。なかでも王越と余子俊とが有名であり、王越は勦討戰にすぐれ、余子俊は、どちらかといえば防衛線の構築や整備に勳功があつた。

王越は成化六年以來、榆林を中心にオルドスにおけるモンゴル族の搜勦と備禦とに全力をかたむけたが、成化九年九月には、ついに敵の虛に乘じて紅鹽池にある滿都魯（マングダール）、孛羅忽（ボルコ）、阿加思蘭（ベケリスン）ら三頭目の本營を急襲し勝利をえている[31]。このためマンダグールやベケリスンらの勢力はおとろえて、しばらくはオルドスにおけるかれらの侵寇は、下火になつたといわれる。やがて成化十年に固原に總制府が新設されると、かれは延綏・寧夏・甘肅三邊總制として軍務をつかさどることに

なつた。

余子俊は、王越よりややおくれて巡撫延綏副都御史として赴任し、成化七年五月から十三年十月まで延綏にあつて活躍したが、その間、成化八年には楡林城の擴張工事を監督し、またその東・中・西三路にわたる邊墻をきずくなど、楡林を軸とする防衛體制の確立整備のため全力をかたむけている。皇明實錄、成化十年閏六月乙巳の條に、邊墻の修築に關するかれの奏文がみえるが、それによれば、つぎにかかげるように邊墻のながさは東西一千七百七十里におよび、壕墻崖砦八百十九座、小墩七十八座、邊墩十五座をかぞえている。

余子俊奏、修築邊墻之數、東自清水營紫城砦、西至寧夏花馬池營界牌止、剷削山崖、及築垣掘塹、……始爲之役兵四萬餘人、不三月功成八九、……凡修邊墻東西長一千七百七十里一百二十三步、守護壕墻崖砦八百一十九座、守護壕墻小墩七十八座、邊墩一十五座

その後成化十年には、巡撫寧夏都御史の徐廷章が河東の邊墻、――黄河嘴から花馬池にいたる――三百八十七里を修築して、余子俊の邊墻に接續させたが、これら二邊墻を河套の外邊墻という。

余子俊が、このような大規模な邊墻造營工事に著手することができたのは、延綏地區へ投入された數萬の防衛軍士馬に對し、内地から輸送する糧秣補給の費用を、これによつて節約しうるという、みとおしが憲宗によつて支持されたことが、おもな理由であらう。この間の消息について、明史卷一七八余子俊傳は、もつとも具體的につたえているので、つぎにその原文をかかげてみよう。

成化八年余子俊復言、今征套士馬屯延綏者八萬、芻菱煩内地、……軍資姑以今年之數約之、米豆需銀九十四萬・草六十萬、每人運米豆六斗・草四束、應用四百七萬人、約費行資八百二十五萬、公私煩擾……帝是子俊言、命速擧

こうして東西一千七百餘里にわたる邊墻が完成すると、墻内の地には屯田が開墾され、年年六萬石の米糧がえられたという。實錄、成化九年十一月甲辰の條にみえる巡撫馬文升の奏によれば、楡林以南の屯田に對しては、百畝につき子粒六石

を上納さすことが常例であつたといえば、もし六萬餘石が租入であるとすれば、まさに屯田千頃が開拓された計算になる。

註

(1) 現在河套行政區として陝壩鎮、臨河縣、狼山縣、五原縣、安北縣、杭錦後旗、達拉特後旗の諸縣・旗があげられるが（森鹿三、中華人民共和國行政區畫表、人文地理第一〇卷第一號）、ここは明代以後清・民國はじめごろまでは、伊克昭盟（イクチヤオ）の鄂爾（オル）多斯（ドス）部七旗の遊牧地であつた。

(2) 和田　清　東亞史研究、蒙古篇、一〇九頁參照。

(3) 王國維　觀堂集林卷十二、秦郡考參照。

(4) 和田　清　豐州天德軍の位置について（史林第十六卷二號）參照。

(5) 田村實造　明代の九邊鎮（石濱先生還曆記念論文集所收）參照。

(6) たとえば皇明實錄成化二年三月己未の條に、オルドスの地理にくわしい百戶朱長の言をのせているが、それによると、正統年間に寧夏副總兵黃鑑が東勝州、黃河西岸の一順樹から寧夏黑山觜馬營等處にいたる東西七百余里の間に、十三城堡七十三墩臺を立てんことを奏したがゆるされなかつた。同じく總兵官石亨が延綏衛の各城堡の移置整備を請うたが、これも納れられなかつたため、成化になつた現在、ひとびとによつてそれが後悔されているという。

(7) 和田　清　東亞史研究、蒙古篇、三五二―六四頁參照。

(8) ボライがモリカイにほろぼされたのは成化二年であるが、兩人はすでに以前から死闘していた。たとえば皇明實錄、成化元年十一月辛未の條に、朶顏三衛に使した後軍都督帶俸都督同知季鐸の復命がみえる。そのうちに泰寧衛の大頭目兀喃帖木兒の言をのせて

……蓋迤北毛里孩與孛來相讐殺、其人馬分散在邊攪擾

とあることからもしられよう。

(9) モリカイがオロチユを急襲してオルドスから追放したことは、皇明實錄、成化二年十月丙辰の條に、監督軍務太監裴當等の奏文をのせて

今年九月諜報、賊首阿老出等擁衆入邊搶掠、毛里孩率衆襲其老營、盡掠其人口孳畜、阿老出同其子及頭目十餘人俱遁去

とあるところから、あきらかである。

(10) 當時オンニユード部は、北部マンチユリアのハイラル北方によつていた（和田清　東亞史研究、蒙古篇三七六頁）

(11) 皇明實錄、成化二年七月戊戌、八月己丑の條などを參照。

(12) 皇明實錄、成化二年九月辛巳の條にも

太保孫繼宗、少保李賢等會議、以爲毛里孩久居河套、懼瓦剌阿失帖木兒（瓦剌の酋長）與之讐殺、不敢渡河而北

という。

(13) 和田　清、同上書、三八四―六頁または兀良哈三衛に關する研究（滿鮮地理歷史研究報告第十二、十三、四四二頁）參照。

(14) 皇明實錄、成化六年三月戊戌の兵部の奏、同年十一月甲午の總兵官朱永の奏など參照。そのほか成化七年冬十月癸酉の兵部奏にも、成化六年冬以來虜寇五萬餘騎入東山墩・定邊營等

處搶掠とか、あるいは同月辛巳の右都御史王越の奏にも、今年閏九月以來達賊二萬餘騎入黑土圪塔侵掠などといえば、大部隊による侵寇が、ひんぱんにくりかえされていたことがわかる。

(15) 皇明實錄、成化十三年九月庚午の條にみえる兵部の議に

　乩加思蘭舊居土魯番迤西、成化六年始入黃河套、與阿羅出各相雄長、時來寇我陝西

とみえる。

(16) ベケリスンが成化七年ごろボルク太子とむすんでいたことは、全邊略記卷四陝西延綏略にも、成化七年の條に、是時孛羅忽及乩加思蘭、累乞還其所俘族とみえるところからも推知されよう。

なお本文に引用した陝西巡撫左副都御史馬文升の奏文は、全邊略記卷四陝西延綏略にも

　成化八年春、馬文升報、虜酋乩加思蘭合阿羅出渡河、已及歲餘、互嚮分路、而部落入抄固・寧

というが、實錄の記載にくらべると、簡略にすぎて文意が通じにくく、かつ肝心な阿羅出の「部落」の二字を脱しているため、阿羅出はまだ生存し、あたかもベケリスンと連合して黃河をわたってオルドスに潛入したかのような誤解をまねくおそれがある。

(17) 皇明實錄、成化十一年十月己卯の條、および同十二年四月丙子の條參照。

(18) 和田　清　同上書、三九三頁

(19) 皇明實錄成化十五年五月庚午の條にのせられた福餘衞都指揮扭歹等の奏報に

　迤北乩加多思蘭爲其族弟亦思馬因所殺

という。なお實錄には、この文につづいてベケリスンのオルドスにおける活躍について詳記している。

(20) 皇明實錄成化二十二年七月壬申の條に、鎭守甘肅總兵官焦俊が哈密都督からの來報として克捨と亦思馬因との死を奏しているから、兩人が死去したのは、その日以前のことである。

また小王子の死については、成化二十三年三月癸卯の條に、巡撫遼東都御史劉瀞等が泰寧衞などの夷人の傳報として奏上している。

(21) 萩原淳平、小王子に關する一考察（東洋史研究卷十七、四號所收）

(22) 全邊略記卷四、陝西延綏略、成化八年の條にみえる馬文升の奏にも

　虜入寇之路、多安邊・定邊・花馬（池）而進、抵于崩城・鹽池約三百餘里

という。

(23) これについては皇明實錄、成化二年十一月己丑の兵部尚書王復の上奏にも

　東自黃河岸府谷堡起、西至定邊營、連接寧夏花馬池邊界、東西縈紆二千餘里、……止憑墩臺城堡以爲守備、緣有舊城堡二十五處、……遠至一百二十餘里、近至五六十里……遇賊入境、傳報聲息、倉卒相接、比及調兵、策應軍民、已被擒虜、達賊俱已出境

とあつて、まつたく防備のてうすのため、緣邊の軍民は、ほ

んろうされているありさまである。

(24) 皇明實錄、成化二年十一月己丑の條參照。

(25) 土民兵の徴用については、殊域周咨錄卷十八韃靼、成化二年の條に延綏都御史盧祥の言をのせて

營堡兵少、而延安・慶陽府州縣民多堯勇習見胡虜、敢與戰鬬、若選作土作、練習調用、必能奮力、各護其家……於是延安之綏德州・葭州、慶陽之寧州・環縣皆選民丁之壯者、編成什伍、號爲土兵、每名量免戶租、時得丁壯五千餘名

といい、皇明實錄、成化二年五月辛未朔にも巡撫陝西右副都御史の奏をおさめて

比者兵部以河套虜衆謀欲犯邊、擬調陝西諸衛官軍幷僉點延綏諸處民兵、分守延綏・榆林・鄜慶諸營堡

といつている。

(26) 皇明實錄、成化六年五月癸巳の條參照。なお同文は全邊略記卷四陝西延綏略にもみえる。

(27) 榆林鎭をめぐる營堡について、明史卷四二地理志に

又東有長樂堡、分轄雙山等十二營堡、爲中路、又有神木堡、分轄鎭羌等九營堡、爲東路、西有安邊營、分轄永濟等十二營堡、爲西路、俱成化後置

といい、また天下郡國利病書、第十八冊、陝西上には

榆林鎭、巡撫都御史・管粮僉事・總兵・副總兵・遊擊・方面都司俱內駐箚、本鎭所守、中路十二營堡、東由高家堡、西至清平堡、東路參將駐箚于神木堡、分守九堡、東由黃甫川、西至栢林堡、西路管粮僉事駐箚于靖邊營、參將駐箚于新安邊營、分守十三堡、由東隴州城至鹽場堡

とみえる。そのほか榆林の延綏鎭については秦邊紀略卷五、延綏衛の條にも、くわしい記載がみえる。

(28) 皇明實錄、成化六年三月壬辰の條參照。

(29) このときの王越の戰勝については皇明實錄、成化九年十月壬申の條にくわしい。また王越の陝西における活躍については明史卷一七一、王越傳に具體的にのべられている。

(30) 陝西北邊の防衛に要する軍費、糧草の負擔は、一般民にとつては、まつたくたえがたいものがあつた。これは、皇明實錄に

成化十年二月戊辰、戶部郎中李烱然奏、陝西頃有邊事、日支糧草動以萬數、皆出於民、有一家用銀四十兩者、一縣用銀五・六萬兩者、公私匱竭、民不聊生、往往流移他方、以一里（里甲）計之、大率十去其五

とある一事からも推測されよう。

Ordos in the T'ienhsün 天順 and Ch'enghua 成化 Eras of the Ming 明

Jitsuzô Tamura

The article treats the following problems related to the defence of Ordos against the invasions of the Mongols during the T'ienhsün and Ch'enghua eras : first, the penetration during the Cheng t'ung 正統 and Chingt'ai 景泰 eras of the Mongols into Ordos with its geographical and historical background ; secondly, activities of the two Mongol leaders, Bolai in the T'ienhsün era and Oroju in the Ch'enghua era; thirdly, Molikhai's invasion of North China and the construction of the Ordos Long Wall. Regarding the last point it is pointed out that the Ming built up a strong defence system under Wan Yüeh 王越 and Yü Tsu-chün 余子俊 with Yülin 榆林 as headquarters against the invasion of the Mongols under Molikhai, and the present Ordos Long Wall extending from Yülin to Humach'ieh 花馬池 was constructed by Yü Tsuchün who set up the colonial militia inside Ordos.

Mongolia in the Early Period of the Ming

Junpei Hagiwara

With the fall of the Yüan 元 dynasty the Mongols in China fled to their homeland. Most of them did not resume nomadic life and lived in towns and villages, while the rest surrendered to the Ming and were allowed to return to China. The latter were mostly enlisted in the Ming army and had good treatment as the result of the Ming's appeasement policy toward the Mongols, but, when the Mongols ceased to be a menace, the Ming began to maltreat them, sometimes enforcing them become peasants. Their discontent led them to take part in Ch'engtsu's 成祖 rebellion. After Ch'engtsu's success they were rewarded with improving their status. Incidentally, the author refers to causes of the fall of the Yüan-Mongols, problems of returning from a nomadic to sedentary life, and the nature of garrison soldiers under the Ming.